
交換日記

まるくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交換日記

【Nコード】

N2498W

【作者名】

まるくま

【あらすじ】

少女が待ち望む交換日記。

日記の中で言葉を交わす若い二人は、二度と会えなくなっても、ずっと心が繋がっていた。

やっと届いた最後の交換日記は、少女が長年望んだものだった…

少し不思議な、恋のお話です。

聖良

庭からの明るい夏の日差しが部屋に差し込む中、電源の点いていないテレビを凝視していると、玄関の方で物音が聞こえた。何かが郵便受けに投函された音だった。

その音に気が付いた聖良は、視線をテレビ画面から玄関へ続く廊下へと移した。廊下の前には暖簾が掛かっており、聖良の視線はそこで遮られた。静かに風に揺れる暖簾を見つめながら、小さな耳を敬そはだてて、ドアの外の気配を伺ったが、郵便受けに投函していった人物の気配を感じ取ることはできなかった。

聖良は徐おもむろに立ち上がり、軽やかな足取りで玄関へと向かった。裸足のまま玄関に下り、高鳴る胸を抑えながら、郵便受けの中に手を入れた。

郵便受けから出した手の中には、1冊のノートがあった。A4サイズの大学ノートは新品の輝きを放っていた。

聖良はそれを両手で胸に抱え、小走りで先ほどの部屋まで戻った。広い和室の真ん中には、大きな長方形の木製の机が置いてある。重厚なその机は、祖父が骨董屋で衝動買いした一品で、骨董屋の店主によれば、何百年も前に作られた、とても貴重なものだといいとだった。

聖良はその机に正座を崩した格好で座り、胸に抱いたノートをそっと置いた。表紙には、「交換日記」と、達筆な筆文字で書かれていた。

部屋の縁側の襖は開け放たれており、そこから吹き込む初夏の爽やかな風が、聖良の長いお下げを僅かに揺らした。

聖良は愛おしそうにノートを撫でた。

手を止めて、目を閉じると、浩太の顔が瞼に浮かぶ。坊主頭に白いシャツ、黒い学生ズボンに真っ白なスニーカー。照れくさいのを隠すかのように、口を尖らせてわざと不機嫌そうな顔を作っているのが、聖良はおかしかった。

しばらく夏の風に身を任せ、頭の中に浮かんだ浩太の姿を眺めていたが、誰かが呼ぶ声に目を開いた。

きよろきよろと辺りを見回してみるが、聖良の他には、人間は見あたらなかった。

再びノートに目を落とし、ゆっくりと表紙を開いた。

『六月十八日 月曜 晴れ

今日はとても気持ちの良い風が吹いていますね。聖良さんはお元気でしょうか。僕はとても元気でやっております。

こちらに来て、早一年が経とうとしていますが、未だにこちらの生活に慣れることはありません。飯も、どうやら僕の口には合わないようです。

聖良さんが作ってくれた御御付が、素晴らしく美味かったことを思い出します。

これを書いている間にも、早く聖良さんの元に帰りたくて、たま

らない気持ちになります。

自分のことばかり書いてしまいました。申し訳ありません。

聖良さんは、元気にしておりますか？そちらは全て無事でしょうか？

いつもいつも、聖良さんのことを気にかけております。

どうか、お体には気をつけて。

それでは、また近いうちにお会いできるのを、楽しみにしております。

冴島浩太』

猫

読みながら、聖良の顔には笑顔が浮かんでいた。ゆっくりと一枚ページ開き、鉛筆を取って書き始めた。

『六月十八日 月曜 晴れ

浩太さん、日記楽しく拝見致しました。

浩太さんの書いた文字を見ると、まるで実物の浩太さんとお話をしているような気持ちになり、とても幸せな気持ちになりました。

私はとっても元気にしております。その他のことも、全て、全く無事ですので、安心して下さいね。

浩太さんの声を聞けなくなって、もう一年も経つのですね。長いようで短いという、何とも不思議な気持ちであります。』

ここまで書いたところで、聖良はふと顔を上げた。また、どこからか聖良を呼ぶ声が聞こえたような気がしたのだ。よくよく耳を澄ますと、どうも少女の声のようだった。

再び辺りを見回すと、いつの間にか足元に、白黒の猫がちよこんと座っていた。

聖良が優しく微笑み、猫の頭をゆっくりと撫でると、猫は気持ち

良さそうに目を閉じた。

「どこから来たの？猫ちゃん。」

猫は答えることなく、気持ちよさそうに撫でられるに任せていた。

しばらく白黒猫を撫でるために筆を止めていたが、すっかり伸びて寝転がっている猫から手を離し、再び鉛筆を手を取った。

「今、私の元に可愛らしい猫ちゃんがあります。浩太さんにも見せてあげたいわ。猫ちゃんの頭を撫でながら、何か名前を付けようかと思いました時、浩太さんの顔が浮かびました。」

何故かというと、この猫ちゃんの白黒の模様が、まるで浩太さんのようだからです。

頭の黒い部分は浩太さんの坊主頭。体の白い部分は浩太さんの白いシャツ。足の黒い部分は浩太さんのズボンの色。そして、この猫ちゃんの足先だけが、真っ白なんです。まるで浩太さんのスニーカーのようでしょう？

思わず笑ってしまいました。笑ってしまいましたけど、それと同じ時にとて浩太さんに会いたくなくなってしまいました。

会いたくて会いたくて、たまらない気持ちになったのです。

もうすぐお帰りになると分かっているけど、一分一秒でも早く過ぎてくれはしないかと、居ても立ってもいられません。

浩太さんがお帰りになる日まで、私はこの猫ちゃんとお待ちしております。

どうぞ、お体にはお気をつけてください。

無事お帰りになった際は、腕を奮って御御御付をお作りします。

では、また今度。

澤 聖良『

うたた寝

書き終わり、静かに鉛筆を置いて最初から読み直してみた。読み返し終わったところで、足元で伸びていた猫が一声鳴いた。

ノートから猫に目を移し、片手で猫のあごの下をくすぐってやると、猫はゴロゴロと喉を鳴らしてより大きくひっくり返った。

「あなた、どこから来たの？お家はあるの？」

ゴロゴロとひっくり返っていた猫が、すっと目を開いて聖良を見つめた。

「そう・・・あなた、お家がないのね。では、うちの子になる？」

ひっくり返っていた猫が起き上がり、聖良の膝の上に乗って座り込んだ。

膝の上の猫を両手で抱きしめ、そのぬくもりを感じながら、聖良は小さい声で呟いた。

「私、一人なのよ。私と一緒に、浩太さんを待ってくれる？」

聖良に抱きしめられた猫は、また一声鳴いた。まるで、聖良の問いに答えてくれたようだった。

猫を抱きながら、聖良は何か不思議な感覚を覚えた。違和感というべきなのか、何か言葉にできない、目の前にあるのに見ることができない何かがあるような、不思議な感覚だった。

その時、聖良は自分の周りに漂う匂いに気が付いた。

顔を上げ、縁側の外に広がる庭へ目をやったが、匂いの元になるようなものは見当たらなかった。

「何の匂いかしら・・嗅いだことがあるような、懐かしいような匂いだわ。」

膝の上の猫に視線を落とすと、猫は膝の上で丸くなって、目を瞑っていた。

「ねえ、あなた、この匂い何か知っている？」

そう聞いてみたが、猫は何も答えることなく寝息を立てている。

その頭を撫でているうちに、段々と瞼が落ちてきて、ついには猫と一緒に眠りに落ちていた。

頭をテーブルに乗せた格好で、聖良は目を覚ました。頭を起こし、桐箆笥の上に乗っている時計付ラジオを見ると、一時半を指していた。

どれくらい眠っていただろうかと思っただが、外の明るさがそれほど変わっていないことに気が付き、少し安堵した。

テーブルの上を見ると、先ほど書いたばかりの交換日記が消えていた。聖良は慌てて机の下や周辺を探してみたが、影も形も見当たらなかった。

聖良は、所在無げに電源の点いていないテレビを見つめながら、あのノートはいつ戻ってくるだろうかと思っていると、玄関の方から何かが落ちる、コトンという音が聖良の小さな耳に届いた。

その音を聞いたとたん、聖良の顔はパツと明るくなり、笑顔が零れた。

しかし、すぐには動かず、玄関の外に誰の気配も感じないことを確認してから、立ち上がって玄関に向かった。

裸足で玄関に下り、郵便ポストの中に手を入れると、まさしくノートが手に触れる感触があった。

そつと手を出すと、手にはノートがあった。

A4サイズの大学ノートは、長年使い古されたような格好だった。ノートの角や端は黒ずみ、折れ曲がっている。

聖良はそれを両手で胸に抱え、小走りで先ほどの部屋まで戻った。先ほどと同じ位置に同じ格好で座り、机の上にそつとノートを置くと、表紙には変わらない達筆な筆文字で、「交換日記」と書かれていた。

聖良は高鳴る胸を抑えながら、ゆっくりとノートを開いた。

浩太からの日記

☽八月二日 木曜 雨

聖良さん、お元気でしょうか。こちらはとても暑いですが。それは気が狂いそうなほどの暑さです。そちらもとても暑いことでしょう。

体調を崩されたりはしてありませんでしょうか。心配してあります。

ところで、この交換日記が、とても汚れてしまっていて、さぞ驚かれたことと思います。

あちらこちらに行かされて、その度にこの日記を肌身離さずに持ち歩いた結果なのです。

どうか、ご容赦ください。

聖良さんは覚えておりますでしょうか。以前、僕が帰ったら腕を奮って美味しい御御付を作ってくださいと、約束してくださいましたね。

その約束だけを心の支えに、日々を過ごしております。こうしてこの日記を書いているうちに、聖良さんの笑顔が臉に浮かびます。

聖良さん、会いたい。死ぬ前に、もう一度お会いしたい。一目でいい、この目で聖良さんを見て、この手に聖良さんを抱いて、僕の全てであなたの全てを感じたいのです。

弱音を吐いてしまつたとき、どづかお許しください。

冨島浩太』

呼ぶ声

読み終わり、聖良は戸惑った。浩太の様子がいつもと違うことが、日記からひしひしと伝わってくるのだ。

胸の中に急速に広がる不安という暗雲を何とか晴らしたいと思いついさつきまで膝に乗っていた猫を探した。

しかし、部屋の中には気配すら感じなかった。立ち上がり、縁側から庭を見渡したが、やはりそこにも気配が無かった。

浩太にそっくりなあの猫を、どうしてももう一度腕に抱きたいと思えば思っほど、焦りが募り、今にも泣き出しそうな目になった。

その時、庭の草木や土によって冷やされた生暖かい風に乗って、何かの音が聞こえた。

「・・・猫ちゃん？」

聖良が耳を澄ますと、その声は隣の部屋から聞こえてくるようだった。

縁側を伝って隣の部屋に入ると、そこは、どこに何があるのかも分からないほど真っ暗だった。

何か異質な空気を感じたが、あの猫を腕に抱きたい一心で、思い切って部屋に一步踏み入った。

「猫ちゃん？そこに居るの？」

部屋の奥に向かって声を掛けると、今度ははっきりと猫の鳴き声

が耳に届いた。

「よかった・・・！そこでじっとしていてね。今そちらに行くからね。」

暗闇の中で目を凝らしながら、ゆつくりと先を探るように進んだ。すると、二歩ほど歩いたところで、急に足元から猫の鳴き声が響いた。

驚いて足元を見ると、あの白黒猫が聖良を見上げていた。

「あら。あなた、こんなに近くにいたのね。」

自然に浮かんだ笑顔でそう言うと、両手で優しく猫を抱き上げた。まるで腕の中に浩太がいるかのように、大事に抱きしめた。

ふと真つ暗な部屋の奥から視線を感じ、そちらに目をやった。

そして、先ほどと同じ聖良を呼ぶ声が、また微かに聞こえたのだ。

コウタ

「誰か、いるの？」

恐る恐る声を掛けるが、何の返事もなかった。相変わらず真っ暗で何も見えないが、視線だけははっきりと感じた。

無意識のうちに、腕に猫を抱いたまま足が進んでいた。

「・・・どなた？何かご用？」

何も返ってこない暗闇にもう一步足を進めようとした時、何かの足に引っかかった。

転倒するまではいかなかったが、少し体勢を崩して前にのめった。それでも、猫は両手から放さなかった。

体勢を立て直し、何に躓いたのかと足元を確認すると、布団の端が目に入った。

（この模様、どこかで見たような・・・）

布団の模様に目を取られていると、すぐ近くに何かがいる気配を感じ、弾かれたように顔を上げた。

そこには、同じ年くらいの少女が立って、聖良を見ていた。不思議と聖良の頭には不審や恐怖は無く、ただただ黙って見つめ返していた。

(変わった格好の子・・・)

そう思っていると、少女が口を開いた。

「コウタ、こっちにおいで。」

目の前の少女が言うと、聖良の腕の中で大人しくしていた猫が、急にピヨンと腕から飛び出した。

「あ、猫ちゃん！」

驚いて手を差し出して猫を捕まえようとしたが、その手もすり抜けて、「コウタ」と呼ばれた猫は、少女の腕の中に納まった。

「ねえ、お願いだから、その子を連れて行かないで。私と一緒に、浩太さんを待つて。お願いだから・・・！」

聖良は少女に懇願したが、少女は目の前から猫とともに消えていた。

「・・・猫ちゃん・・・」

聖良の目に薄っすらと涙が浮かんだ。もうあの猫は戻らないのだと察した聖良は、ゆっくりと元の部屋へ戻った。

机を見ると、交換日記が開いたまま置かれていた。

「そうだわ。お返事、書かないと。」

そう呟いて涙を拭い、小走りに机まで戻り、日記の前に座った。ページをめくろうと日記に手をやった時、読んだはずの浩太の日

記が目に入った。

最後の日記

『八月二十日 金曜 晴れ』

聖良さん、大変お久し振りです。もうすぐお会いできるかと思うと、とても胸が高鳴ります。

あれから幾年月が流れたでしょうか。僕は、ずっとあなたが作る御御御付を待っております。すっかりお腹を空かせて待っていたのですよ。

聖良さん、聖良さんはお元気で過ごしてでしょうか。幸せにお過ごしでしたでしょうか。そればかりが心配でありました。

僕は、聖良さんと出会えた自分の人生を、とても愛おしく、とても大切に思っております。聖良さんもそうであって欲しいと、僭越ながら願っております。

そのお返事は、お会いする時に、是非直接お教えください。

聖良さん、僕と出会ってくれて、僕を見てくれて、本当にありがとうございました。

心から、愛しております。

『冴島浩太』

眠り

「浩太さん・・・」

聖良の目から、大粒の涙が次から次へと溢れ出て、ノートに大きな染みをいくつも作った。細い指で、浩太が書いた文字を何度も何度も撫でた。

どれくらい経ったのか、ふと気がつくと、縁側の外はオレンジ色に染まっていた。

「ああ・・・もう行かなくては・・・」

聖良はそう呟いて、そっと日記を閉じた。

すつくと立ち上がり、真っ直ぐ隣の部屋へ向かった。先ほどは真っ暗だった部屋の中は、縁側の外の光を浴びて、綺麗なオレンジ色に染まっていた。

部屋の真ん中には、先ほど聖良が躓いた布団が敷いてあった。

聖良は、その布団に近づき、そのまま布団の中に潜り込んだ。そして、ゆっくりと目を閉じた。

少女

「おばあちゃん・・・？聖良おばあちゃん？」

再び開いた聖良の目には、猫を連れて行った少女が映っていた。

「お母さん！おかあさん！おばあちゃん、目を覚ましたよ！」

大声で叫びながら、少女は立って部屋を出て行った。

ふと枕元に目をやると、白黒のあの猫がちょこんと座っていた。

「浩太・・・さん。」

「おばあちゃん、コウタが分かるの？」

いつの間にか、先ほどの少女が年配の女性を連れて布団の傍に戻ってきていた。

「あなた・・・このお家の子だったのね・・・私のお家に、迷ったのね・・・」

少女は不思議そうな顔をして、まじまじと聖良を見つめている。

「おばあちゃん、何言ってるの？ここはおばあちゃんの家だよ。」

しかし、その声は聖良の耳には入らなかった。また枕元の猫に目をやり、眩しそうに目を細めた。口には優しい笑みが浮かんでいる。

「本当に、お前は浩太さんにそっくり・・・」

「そうだよ。おばあちゃんが「浩太さんに似てる」って言って、この子に「コウタ」って名前付けたんだよ。覚えてる？」

少女が猫を抱き上げ、聖良の顔のすぐ近くまで寄せてくれた。布団から弱弱しく差し出した手は、皺くちやで染みが目立った。

その手で猫のあごをくすぐっていると、猫はおもむろに少女の手から出て、トコトコ近寄って聖良の顔の前で座り込み、聖良の頬に顔を寄せた。そして、ちらっと舌を出して、聖良の頬を伝っていた涙を舐め取った。

「お母さん、どんな夢見てたの？」

年配の女性の目にも、薄っすらと涙が溜まっていた。

「お父さんの夢、見てたのね・・・」

その時、聖良の鼻に先ほど嗅いだあの匂いが漂った。その匂いの元を辿るように目をやると、隣の部屋からのようだった。

「今、お父さんにお線香をあげたところだったのよ。」

年配の女性がそう言って、少し笑った。

「今、お夕飯の支度してるから、ちょっと待っててね。マリ、手伝って頂戴。」

「え、私ここにいる！」

「お願いよ、手伝って頂戴。お父さんの法要でお客さんが多くて、

大変なのよ。」

立ち上がりながら年配の女性が言った。

「はあ〜い。」

少女もしぶしぶといった感じで立ち上がり、年配の女性の後に付いていった。

再会

一人になった聖良は、暫く猫を見つめていたが、疲れを感じて天井に視線を移した。その小さい耳に、隣の部屋からのテレビの音が微かに聞こえてきた。

「今日、2010年8月20日金曜日のお天気はどうだったでしょうか。お天気キャスターの喜多さくん……」

聖良は天井を見つめながら、呟いた。

「あら、私、もう65年も待っていたのね、浩太さん。」

「そうだよ。長い間、待たせてしまつてごめんね。」

枕元の、先ほどまで猫が座っていたところに、別れた時と何も変わらない優しい笑顔の浩太が座っていた。

「浩太さん……あの子見ましたか？とても可愛くて、とても優しい子なんですよ。身寄りを亡くして、町中で泣いていたんです。」

「うん。みんな知っているよ。聖良と浩子とマリのことは、僕は何でも知っているよ。ずっと、見守ってきたからね……」

聖良の目に、再び涙が溢れた。

「浩太さん……あなた、ありがとうございます。ずっとずっと、お会いしたかった……」

「聖良さん、僕もです。とても、とても会いたかった。これからはずっと一緒に居られるよ。何にも引き裂かれることは無い、何にも・
」

そう言って、浩太はそつと聖良の手を取って立ち上がらせた。

立ち上がった聖良は、浩太の手のぬくもりを確かめるように強く握り、そのまま浩太の腕の中に体を預けた。

浩太と聖良

「ねえ、お母さん。おじいちゃんってどんな人だったの？」

慣れない手つきで大根の皮を剥きながらマリが聞いた。

「実は、お母さんも会ったことは無いの。お母さん、養女だったから・・・」

「あ、そっか・・・」

「でも、お母さんはお父さんの話をよくしてくれたわ。写真を見せて、たくさん話をしてくれた。とっても愛し合っていたのよ。」

何とか皮を剥き終わった大根をまな板の上に置き、一息ついたマリは浩子の方に体を向けた。

「そのおじいちゃんって、若いときに死んじゃったの・・・？」

浩子は、鍋をかき回していた手を止めて、悲しそうな顔で答えた。

「戦争に駆り出されてね、そのまま帰ってこなかったの・・・お母さん、一人でずっと、この家で待っていたのに・・・」

「ふうん。」

そう言ったきり、二人は何も喋らずに黙々と夕ご飯作りに専念した。

「あら？何かしら、このノート・・・」

台所をマりに任せ、食事の準備のために和室の真ん中に鎮座する、大きく立派な机の上を片付けようとした浩子の目に、古びたノートが映った。

表紙には、達筆な筆文字で「交換日記」と書かれていた。何気なくパラパラと中をめくってみると、8月2日の日付以降、白紙になっていた。

「これ・・・お父さんとお母さんのだわ・・・」

その日記を見て、浩子は父の母に対する愛情の深さを感じ、また目に涙が溜まってきた。

8月2日以降の白紙のページをめくってみると、何故かそこにはついたばかりのような涙の跡と思われる染みが、いくつか付いていた。

「お母さん・・・夢の中で、日記の続きを見ていたの？」

これを見せれば、母が元気になるかもしれない。そう思った浩子が、急いで隣の部屋に持って行くこうと立ち上がった時、美味しそうな匂いが鼻をくすぐった。

まだ夕食を運んでいない机の上を見たが、やはり何も乗っていない

い。きよるきよると辺りを見回すと、仏壇にお椀が一つ、置いてあるのが目に留まった。

「あら？何かしら、これ。」

近寄ってみると、浩子はそれが何なのかすぐに分かった。小さい時から、母がよく作ってくれた、得意料理だったのだ。

「お母さんの御御付・・・お父さんが大好きだったって、言ってたわね・・・」

仏壇の中のモノクロの写真の中で微笑む父の顔を見て、浩子の顔がほころんだ。

「お父さん、美味しい？・・・良かったね・・・」

浩子は溢れる涙を拭い、日記を仏壇に収めた。

そして、母の亡骸に別れを告げるため、娘を呼びに台所へ向かった。

浩太と聖良（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。
次回、ホラーを投稿致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2498w/>

交換日記

2011年8月30日18時10分発行